

第1章 市民運動から国会へ

学生運動にかかわった東工大時代

——若いころ、菅さんは市民運動とのかかわりが深かったと思います。そこで、菅さんと政治との接点について最初にかがいます。1970年に東京工業大学を卒業して、特許事務所勤務し弁理士試験に合格しました。そして、74年、参院選に立候補した市川房枝さんの選挙事務局長を務めました。学生時代はどうしていたんですか。

(1) 「特許権」「実用新案権」「意匠権」「商標権」という「産業財産権」について、すでに登録されていないかを調査したり、特許庁への出願手続きを代理で行う国家資格保有者。すべての弁理士が日本弁理士会の会員で、「特許事務所」を開いて業務する。年1回の国家試験に合格し、弁理士登録をしなければならぬ。



国連平和維持活動（PKO）協力法案を巡って牛歩戦術が続いた1992年6月の衆院本会議で、討論の制限時間を超過し、衛視に押し出されんとする菅氏

菅 私は1946年生まれで、大学に入ったのは1965年です。ストレートで入ったんですけど、大学には5年間いました。学生時代は「現代問題研究会」なんていうサークルを自分でつくって、現実主義的な主張で知られていた東工大教授の永井陽之助³さんや京大助教授だった高坂正堯⁴さんらをお呼びしました。69年に大学が学生運動でもめたため1年延ばして70年に卒業したんです。69年の「東大安田講堂」事件⁵の前後ですね。最後の半年あまりは全学改革推進会議というグループをつくって活動しました。それが政治的活動に直接、踏み込んだ最初だったですね。

「安田講堂」が始まる3日か4日前、東工大でも寮問題をきっかけにストライキが始まって、約半年間バリケード封鎖が続いたんです。私がつくったグループはちよつと変わっていて、学内だけのノンセクトで他大学の学生とつながりがなかった。当時の東工大には、大きく言えば全共闘に近い中核⁶系のグループと、われわれと、共産党系の民青⁷と、秩序派とがあったんです。

——秩序派ってどういうグループですか？

菅 「ストライキなんかやめて、ちゃんと勉強しましょう」というグループですね。東大だと自民党の町村信孝さんがやっていたようなグループですよ。一方、私がつくった改革派グループはゲバ棒は持たないが大学の改革はやるべきだという方針で、一時期、学生大

(2) (1893-1981) 愛知女子師範学校卒。小学校教員、新聞記者を経て、20年に新婦人協会を設立。24年、国際労働機関（ILO）東京支局勤務。同年、婦人参政権獲得期成同盟会を結成。第二次世界大戦期には女性運動のリーダーとして国民精神総動員運動、大政翼賛会の活動に従事した。戦後45年、新日本婦人同盟を組織。53年、参院選に無所属で初当選。以後、当選5回。

(3) (1924-) 国際政治学者。東大卒。北大教授、東工大教授、青山学院大教授などを務めた。現実主義的な外交論を展開し、非武装中立の平和論に反対して非核・軽武装の論陣を構えた。著作に『平和の代償』『冷戦の起源』など。

(4) (1934-1996) 国際政治学者。京大卒。京大教授。パワーポリティクスを重視し日本中立論を批判。現実主義の立場から政治外交について幅広く論じた。著作に『海洋国家日本の構想』『古典外交の成熟と崩壊』『文明が衰亡するとき』など。

(5) 安田講堂は、25年に安田財閥の初代安田善次郎の寄付によって建てられた東京大学本郷キャンパスの講堂。68年の東大紛争で全学共闘会議（全共闘）に占拠されたが、69年1月18日、19日、大学側の要請で警視庁の機動隊が投入され、学生が強制的に排除された。

(6) 全学共闘会議の略称。68年から69年の全国的な大学闘争の主体となった運動組織で、学生による単位自治会やその連合体ではなく、闘争のために学部学生や大学院学生、教職員の個人ないしは集団を糾合した横断的な組織。

(7) 新左翼のセクト「革命的共産主義者同盟全国委員会」が分裂を繰り返して63年にできたグループの1つ。「マルクス主義学生同盟・中核派」と名乗ったことに由来する。成田闘争では建設省幹部や空港公団職員らの自宅に対する時限発火装置をしかけた放火・放火未遂ゲリラ事件や自由民主党への火炎放射車による放火事件などを起こした。

(8) 青年を構成員とする社会運動団体で、正式名称は日本民主青年同盟。「日本共産党のみちびきをうける」としているが、日本共産党とは完全に別の組織としている。署名活動やボランティア活動、平和運動などを続けている。

会でわれわれの提案が賛成多数で採択され主導権をとってしまった。それで卒業しそこなつたというか、しづらくなって、5年生をやったわけです。

——学生時代は、将来、どういう道に進もうと思っていたんですか。

菅 当時は、アインシュタインとか湯川秀樹さんとかバートランド・ラッセルらがやってきた核兵器廃絶や科学技術の平和利用を推進する「パグウォッシュ会議」という運動（ラッセル・アインシュタイン宣言）に強い印象を受けていました。東工大は技術系の学校でしたから、私もそういう技術者の道に進もうと思っていました。ただ技術の発展が社会に与える影響は必ずしもプラスだけではないという問題意識がありました。

——菅さんは学生時代にカウンター・カルチャーの流れの中にいたわけですね。戦後秩序主義とか近代文明礼賛に対する批判が68年ころ世界的に起こりました。アメリカの場合はそれが反ベトナム戦争の運動という形で出たわけです。

菅 全体から言うそうでしょうね。私の場合、技術の発展と人間らしい生き方は必ずしも予定調和的ではないんじゃないかと考えていた。大きく言えば、最初から近代文明に対する疑問みたいなものを持っていたんですね。

——お父さんも同じような考え方をしていたんですか。

菅 そこまではっきり言っていたわけじゃなかった。ある本を紹介してくれましたね。オ

ルダス・ハックスリーの『すばらしい新世界』（『Brave New World』）とこう本で、父はこの本のことをよく話してくれました。僕はこの本を何度も読むんです。これはなかなかおもしろい本で、すべての社会の矛盾をなくしたすばらしい新世界を、空想小説的に書いたわけです。欧米では学生がジョージ・オーウェルの『1984年』と一緒によく読む有名な本です。

この本にはマルクス主義批判も入っている。ユートピアを人工的につくろうとすると、非人間的な社会になるということをなかなかおもしろく書いていて、これも私の1つの原点になっていますね。政治の役割についても考えさせられるんです。本来、政治は夢を語

(9) イギリスの哲学者バートランド・ラッセル卿と、アメリカの物理学者アルベルト・アインシュタイン博士が中心となって、55年に当時の第一級の科学者ら11人が核兵器廃絶と科学技術の平和利用を訴えた宣言文。湯川秀樹氏も加わった。「将来の世界戦争では必ず核兵器が使用されるだろう。そのような兵器が人類の存続をおびやかしている。私たちは世界の政府にあらゆる紛争問題の解決のための平和的な手段を見いだすよう勧告する」などが内容。

(10) (1894-1963) イギリスの作家。小説、エッセイ、詩、旅行記など多数の作品を発表したが、小説によってその名を広く知られている。代表作が『すばらしい新世界』。

(11) (1903-1950) イギリスの作家。40年代に書き上げた『動物農場』と『1984年』が代表作。37年1月、スペイン内戦に参加して人民戦線の兵士たちの勇敢さに感銘を受け、この体験を『カタロニア讃歌』として刊行した。

り理想を語りユートピアを語るわけですが、私の言い方で言う不幸を最小化する仕事であって、幸福というユートピアを強制的につくると『Brave New World』のようになってしまう。当時、学生運動でもマルクス主義なんかの連中と議論すると、彼らはユートピア社会を語るわけです。階級がなくなればすべてが解決するんだ、みたいなことを言っていた。でも、階級がなくなつてすべてが解決するなんてとても思えなかった。だから僕はマルクス主義には最初から懐疑的でした。

——理科系の人がなぜ問題意識を社会化していったんですか。

菅 永井陽之助さんが北大から東工大に来られて、高坂さんとか、南北問題の衛藤藩吉¹²さんから現実主義者と呼ばれた学者の本を読んだり直接話を聞いたりしていました。東工大にはあのころからわりとおもしろい文系の学者がいましたね。私のころは宮城音弥¹³さんとか永井道雄¹⁴さんがいました。永井道雄さんには大学論をだいぶ教えられました。宮城さんの講義はよく受けましたけど、永井陽之助さんの講義は、1回受けて全然わからないことをしゃべるので、2回目からは出なかつたですね。もつともその後、学園紛争を通して親しくなりました。(笑い)

特許事務所を経て市民運動に

——卒業後は特許事務所に入って、さらに弁理士試験を受けたのですね。

菅 大学4年生になるころ、そろそろ就職のことを考えなくてはならないので教授に呼ばれました。私の担当教授が就職担当だったので「どうする？」と聞かれました。当時、東工大では学生の3分の1ぐらいいは大学院に進んでいた。親父も「大学院に進んで、もうちょっと勉強したほうがいい」と言っていましたけど、僕はそんなに勉強が好きじゃなかった。このままでは親父と同じ道を歩み、モーレッツな技術屋サラリーマンになりそうだと思ったので、少し自由度の高い仕事がないかなと思っていました。そんなある日、本屋でいろんな資格についての本を読んでいたら「弁理士」という資格を説明している本にぶつかった。これで行こうと思って、本に書かれていた弁理士会というところに電話をかけ、「来年、大学を卒業するんですけど、どこか就職口を紹介してもらえませんか」と言ったら、「履歴

(12) (1923-2007) 国際政治学者。東大卒。東工大助教授、東大教授、青山学院大教授などを経て、亜細亜大学長となり「芸一能入試」などの大学改革をすすめた。1966年、論文「日本の安全保障力をどう高めるか」で第1回吉野作造賞。

(13) (1908-2005) 心理学者。京大卒。東工大教授。「精神分析入門」(岩波新書)で心理学を紹介し、心理学ブームの火付け役となった。

(14) (1923-2000) 教育社会学者、評論家。京大卒。京大助教授、東工大教授。朝日新聞論説委員などを務めた。また、三木内閣で文相。国際連合大学の日本への誘致などに尽力した。

書を出してくれたら会報に載せる」と言われたんです。それが縁である特許事務所に決まった。

ところが、就職が決まったあとに大学がもめ始めて卒業できなくなってしまった。内定先のボスに「申し訳ありません。卒業できませんので、就職の件は白紙に戻してください」と言う。「じゃ、来年来なさい」と言われましてね。

——ずいぶんおらかな事務所ですね。

菅 僕は特許事務所に入ることを決めてから資格をとろうと思って勉強したんですが、大学がもめたりして学生時代に資格はとれなかった。5年目に卒業して約束どおり事務所に入れてもらった。すぐ結婚したので、なんとかしてその年に資格をとろうと思って頑張ったんですがまた落っこちましてね。つまり、思い立ったのが4年生のときで、4年生で受けて、5年生で受けて、卒業して最初の年に受けてと、結局3回も落ちました(笑い)。40倍ぐらいの競争率でした。結局、4回目にやっと通った。僕は国会議員選挙も3回落ちましたから、4回目というのがラッキーナンバーなんです。(笑い)

——特許事務所ではどういうことをしていたんですか。

菅 資格をとるまでは見習いみたいなものです。試験に通ってからいろいろ考えて、4年目で辞めようと決意しました。だから最後の半年か1年間は人生で唯一、計画的に貯金し

ましたね(笑い)。もう嫁さんがいて長男坊が生まれていましたから、事務所を辞めても最低限の蓄えがいると思ったんです。ちょうど丸4年で辞めて、いちおう資格を持っていますから形式的には自分で事務所を開いたんですけど、実質的には下請かアルバイトのようなものでした。

ちょうどそのときが市川さんの選挙になるんです。74年ですね。70年に大学を卒業して、74年3月31日に特許事務所を辞めて、その年の7月が参院選だった。

僕は弁理士の資格がとれたところからまた社会的に動き始めたんです。最初に始めた運動が「よりよい住まいを求める市民の会」という市民運動で、取り組んだのは土地問題ですね。市街化区域内農地の宅地並み課税¹⁵を推進するという変わった運動で、これは地価を下げるために土地の保有税を高くしようという運動なんです。

都市のサラリーマンはなぜこんなに住宅が持てないのだろうかと考えて、この運動に取り組み始めたんです。その理論的な背景は、華山謙¹⁶さんという、その後、東工大に來られ

(15) 82年以降、三大都市圏の特定市街化区域内農地に限って固定資産税が宅地並みに課税されていたが、その大半は「長期営農継続農地制度」により宅地に比べて数十分の一の税額となっていた。このため、農地所有者は農地のまま保有し、それが宅地供給の障害になるとともに、不平等な税制として批判を浴びていた。

(16) (1939-1985) 東大卒。東大農学部助手、東工大教授などを務めた。東京湾の再生など環境問題について実証的な研究を進め、新聞、テレビなどでも積極的な発言をしていた。

た農業経済の先生が書かれた『地価と土地政策』という本です。この本を読んで「これだ!」と思って仲間を集めて勉強会を始め、シンポジウムまでやったんです。そのシンポジウムに来てもらったのが市川さん、青島幸男¹⁷さん、都留重人¹⁸さん、青木茂¹⁹さんという方たちでした。確か、72年か73年ころです。弁理士試験に合格した翌年か翌々年くらいですね。

——当時の首相は田中角栄氏ですよね。

菅 田中内閣ができたのが72年7月ですね。農地の宅地並み課税という案は自民党から共産党までみんな反対で、結局は骨抜きになった。しかし、私たちは「やれ」という珍しい存在だった。宅地並み課税をしたほうが土地の供給が促進され、その結果、宅地が安くなるわけです。三多摩地区なんてそこらじゅうに農地があるのに、それがちっとも宅地として供給されないわけです。華山謙さんが言う理屈は非常に簡単で、今の制度だと農地として持っているほうが経済原則にマッチするからだというのです。つまり、金利以上の値上りが確実に、税金はほとんど取られないから農地を売るのは例外的なときだけで、例えば娘が結婚したり、家を建て直したり、駐車場とかアパートをつくったときだけ。あとは持っていたほうが得だから絶対に売らない。そして、例外的にしか売られない土地を、圧倒的多数のサラリーマンが買おうとするから、通勤限界地の土地の価格がサラリーマンの

負担の上限で決まるわけです。つまり、いくらサラリーマンの給料が増えたって自分の影を追っかけているようなもので、負担の上限で決まるんだから、ちっとも安くならない。つまり何の意味もないわけです。

供給する側が土地で持っているほうが断然有利なわけだから、いくら需要サイドに安い金利でお金を貸すようにしても、価格が負担可能な上限で決まっていって。だからサラリーマンの給与が増えれば増えるほど上限価格が上がっていくわけです。それを見事に分析したのが華山さんの本です。華山さんは、例外的に土地を売る人はどういう人なのかを、実証的に調べたんですね。

租税特別措置法は市街化区域の農地について宅地転用できないことを前提として、農業収益をベースにした固定資産税評価とか相続税評価で課税した。だから農業収益でいうと

(17) (1932-2006) 早大卒。放送作家として草創期のテレビ界で活躍した。68年、参院の全国区で120万票を集めて初当選、タレント議員のバイオニアとなった。以後、当選5回。95年に東京都知事に当選。

(18) (1912-2006) ハーバード大卒。同大に助手、講師として残ったが、47年、片山内閣で連合国軍総司令部(GHQ)と折衝にあたる経済安定本部(旧経済企画庁の前身)の総合調整委員会副委員長。48年、東京商科大(現一橋大)教授に転じ72年から3年間、学長。成長至上主義を批判し、リベラルな立場から公害問題や福祉論などを展開した。

(19) (1922-) 東大卒。愛知教育大教授、大妻女子大教授などを務めた。83年、サラリーマン新党を結成し、不公平税制の是正やサラリーマンの必要経費容認を公約に掲げて、参院選に初当選。以後、落選を続けた。

当時は1反(約991平方メートル)の相続税評価がわずか84万円とか90万円なんです。ところが実際の取引価格は坪(3・3平方メートル)が100万円くらいする。とすれば、1反の土地は実際は3億円の価値があるのに相続税評価ではわずか90万円にしかならない。これだと絶対に売らないでしょう。

こんな矛盾は解消すべきだと主張したのが僕が取り組んだ最初の市民運動なんです。さきほど言いましたシンポジウムは市川さんら4人の方に来てもらって、私が司会をしたんです。このほか、「市民の会」は、霞が関でピラを撒いたり、いろいろ勉強会を開いたりしました。

——当時はまだ25、26歳ですね。市川さんら著名な4人がよく集まりましたね。

菅 いろんな友人関係のつてを頼ってお願ひしたんです。最初に青木茂さんのところにお邪魔して、青木さんの紹介で市川さんに会って、さらに青島さんに会いに行くという具合にやって4人の参加が実現しました。みなさん、まったく無名の若いわれわれを可愛がってくれました。

市川さんは71年の参院選に東京選挙区から立候補して落選していました。²⁰シンポジウムに参加していただいたことがきっかけで、市川さんの仲間から、「市川さんがつくった『理想選挙推進市民の会』という会に若い男性がいないから、菅さんも顔を出してください

い」と言われて、少し顔を出すようになったのです。すると74年の参議院選挙をどうするかという議論が始まったんですね。いろいろ議論しているうちに、東京選挙区には市川さんの後継者として紀平悌子²¹さんが立候補し、市川さんはリタイアするということになりました。ところが、「それはおかしい」という声が上がって「市川さんを勝手に推薦する会」ができた。医学ジャーナリストの草分けで保健同人社の創立者でもある大渡順二²²さんらに中心になってもらって、市川さんに全国区での立候補を働きかけたわけです。市川さんも最後には「じゃ、やりましょう」ということになった。そういう経緯があって74年の参議院選挙で私が市川さんの選挙の責任者になったんです。

(20) 71年の参院選で東京選挙区(定数4)に立候補した市川房枝氏は55万8千票を獲得したが、6位で落選した。

(21) (1928) 社会運動家。聖心女子学院卒。市川房枝参院議員秘書、日本婦人有権者同盟事務局長、会長などを務め、ロッキード事件に関係した汚職議員の追放運動などを展開した。89年、参院選に当選。

(22) (1904-1989) 医事評論家。「橋大卒。朝日新聞社に入社。肺結核で胸郭成形術を受け、この闘病体験から科学的な結核の普及と啓蒙を目的に46年、保健同人社を創立し、月刊誌「保健同人」の発行を始めた。54年に日本初の人間ドックを開始した。

市川さんの参院選事務局長を務める

——特許事務所を辞めて自分の事務所を開いたばかりだったのでないのですか。

菅 そう、3月末に前の事務所を辞めたばかりでしたが、5月末に市川さんの立候補が決まった後は選挙のためにほとんど不眠不休みたいな状態で、自分の事務所は開店休業どころではなかったですね。

——つまり収入がないまま、市川さんの選挙事務局長をやったわけですね。それにしても、なぜ市川さんだったのですか。

菅 僕が市川さんを担ぎ出そうと思った最初のきっかけは、毎年1月に市川さんが開く「新成人の会」でした。74年に私はその企画を頼まれたんです。それまでは篠原²³先生のような方の講演を聞く企画をやっていました。僕はそれだけじゃおもしろくないから、餅つきを企画したんです。市川さんはそのとき80歳で、その会には私のお袋みたいな年代の人がほかにもたくさんいました。ですから、餅つきとなったら慣れたものであつという間に準備が整った。ところが実際に餅つきを始めると、力のない女性がつくと「べちゃ」という音がするだけでだめなんです。すると市川さんが「私にやらせなさい」と言い出した。周りの人たちが「それはちょっと止めたほうがいいですよ」と言ったんですが、市川さん

は「いえ、私は百姓の娘ですから」と言ってきたりなかった。わりと背の高い方でしたけど、見事に「べしっ」という音を出して決まったんですよ。それを見て、こんなに元気ならば選挙はできると思った。それが市川さんを担ぎ出そうと思った直接的なきっかけなんです。(笑)

——市川さんは簡単に選挙に出ましようと言ってくれたのですか。

菅 朝日新聞に中馬清福²⁴さんという方がおられて、あの方が市川さんを担当していたのですが、いいタイミングで「市川さんが立候補するかどうか迷っている」「青年グループが市川さんに『ぜひ参院選に出ましよう』と働きかけている」という記事を社会面にポーンと書いてくれました。それでワツと火がついたんですね。われわれは半年ぐらい市川さんと口説いていました。あのとときの参院選は「金権選挙」と言われたんですね。だから市川さんは「こんな政治を見過ごすわけにいかない」と立候補声明をされたんです。

ところが、もともとの市川さんの仲間はすでに紀平さんの選挙の態勢に入っていたので、

(23) (1925) 東大卒。東大助教授、教授、成蹊大教授などを務めた。専門はヨーロッパ政治史。日本の政治についても活発な論評を展開し、70年代には政治文化論や市民参加論の分野でオピニオンリーダーとなった。

(24) (1935) 東京都立大卒。朝日新聞社に入り、政治部記者、論説主幹、代表取締役専務・編集担当などを経て、信濃毎日新聞主筆。

彼らに市川さんの選挙をやってもらうわけにはいかなかった。それで私に事務局長をやってくれという話が来たのです。最初に考えたのは人をたくさん集めることでした。そのために仕事をたくさんつくっておこうと思った。いろんな企画を立てて、とにかくたくさん仕事をつくりました。

——全体をどう活発に動かすかという組織論ですね。

菅 せっかく、応援するよと言って多くの人が集まって来ても、仕事がないというのではまずいと思ったものですからね。まあ、いろんなことをやりました。例えば「全国草の根キャラバン」といって、ジープに日本の地図を描いて、鹿児島から北海道まで、小さなスニーカーをつけて駅前ですべて一人でしゃべるんです。私は行っていないんですけど、いろんなところを回って、そのたびに地元の新聞社が取材に来るわけです。結果的には非常に効果的な運動になりました。

おもしろいのは早稲田の雄弁会の学生が「しゃべらせてほしい」と言ってきたことです。しかし、公職選挙法で選挙運動で使うことができないのは車3台にスピーカー3台と決められていた。本隊は有吉佐和子²⁵さんら有名な方が応援に来てくれるんで、学生さんにしゃべってもらう場がないんです。それで、埼玉県内の支持者に店をやっていた人がいたので、その人に頼んでお店の前に看板を立てて、学生にマイクなしでひたすら演説してもらった。

何をしゃべってもいい、ただずっとしゃべっている「マラソン演説会」ですね（笑い）。とにかく、交代ですつとしゃべり続けるんです。

そういう企画がメディアに載ったので、結果的に市川さんは193万票を獲得し、259万票の宮田輝²⁶さんに次いで2番目で当選しました。3番目が183万票の青島幸男さんでした。印象深いのは青島さんの選挙です。青島さんは68年に全国区で当選していましたが、市川さんは71年に東京選挙区で落選したわけです。ともに議員のときは二院クラブで一緒だったんですね。ですから74年に市川さんが全国区に出るとなると、青島さんとはパツティングするわけです。ふつうの感覚だといやがりますよね。だけど、青島さんはまったくいやがらなかった。それどころか、選挙用に車まで貸してくれたんです。では、青島さんはどうするのかと思ったら、選挙の公示日に、欧州議会視察とかいってヨーロッパに行っちゃって、投票日の直前に帰ってきた。それで180万票あまりを集めちゃうんですね（笑い）。まあ、市川さんのほうがちょっと上だったから、よかったですけど。

(25) (1931-1984) 小説家。東京女子大短大部卒。56年に「地唄」が芥川賞候補となり文壇にデビュー。67年『華岡青洲の妻』で女流文学賞。70年代前半には老人性痴呆症や公害問題をあつかった『恍惚（こうこ）の人』『複合汚染』など話題作をつぎつぎと発表した。

(26) (1921-1990) 明大卒。NHKに入り、「のど自慢素人音楽会」「ふるさとの歌まつり」「紅白歌合戦」などの司会で全国的な人気を得た。74年、自民党公認で参院選初当選。以後、当選3回。

74年の8月でしたが選挙が終わって、私は休養をとるために鹿児島県の屋久島にふらつと行ったんです。そこで新聞を読んだら、市川さんと青島さんがそろって経団連を訪ねて「金権選挙、企業ぐるみ選挙をなくすために、財界もこれまでの姿勢を改めてほしい」などと主張して、6項目の要求を申し入れたという記事が出ていたんです。当時会長だった土光敏夫さんが「正副会長会議で、経団連が企業に政治資金の拠出を割り当てることや、経団連の一部の人がそれを担当することをやめるよう、私から提案する」と答えたんです。経団連が金を集めなくなったら、当時は政党助成金もないですから、自民党なんて破産ですよね。それが一面トップに大きく出ていた。私は政治ってこういうメカニズムで動くんだなと思ったんですね。市川さんと青島さんの2人を合わせると約400万票ですよ。400万の有権者の声を象徴的に代表して乗り込んだわけですね。あのととき経団連はいったんは斡旋をやめたんですが、そのあとすったもんだして国民政治協会をつくって、そこを経由して自民党への献金を続けました。このときの話は結局、元の木阿弥にはなるんですが、私にとってはかなりインパクトがありましたね。

——菅さんが初めて国政選挙に出たのは76年の総選挙で、東京7区でした。²⁸

菅 そうです。76年はロッキード事件で田中角栄元首相が逮捕された年ですが、年末に任期満了総選挙になりました。「ロッキード選挙」と言われた選挙ですね。われわれの間で

まただれか出そうという話になって、あちこち駆けずり回っていたんですけど、なかなか立候補する人が見つからなくて、最後に僕にお鉢が回ってきたんです。

立候補することになって私は「朝日ジャーナル」に論文を書いたんです。当時、筑紫哲也さんが副編集長でした。ところがなかなか掲載されなかった。そのうち選挙が始まったのでダメだったのかなと思っていたら、選挙の真っ最中に掲載されたんです。「否定論理からは何も生まれない」というタイトルの論文です。それが最初の選挙で、ポスターには「革新無所属」と印刷しました。

——初挑戦でしたが、いいところまでいきました。

菅 得票は7万票ちよつとで次点でした。私は当選するつもりだったんですけど、みんなはそんなにとれっこないと思っていたから、落選したのに祝杯あげてるんですね（笑い）。あのとときの選挙戦略はただ1つ、「田中角栄対菅直人」でした。対立候補がだれかということに関係なく、徹底して「田中角栄対菅直人」でやっただけです。有権者には「市川さん

(27) (1896-1988) 東京高等工業学校(現東工大)卒。石川島造船所入社。戦後、石川島重工業、石

川島播磨重工業の社長、会長などを務めた。その後、東京芝浦電気(現東芝)社長、会長、経団連会長。81年、第二次臨時行政調査会会長となり、行革問題に取り組んだ。

(28) 東京7区(定数4)に立候補した菅氏は7万1千票あまりを獲得して次点に終わった。この総選挙は自民党が大敗し、新自由クラブが躍進、公明党や民社党が議席を伸ばした。

の選挙をやった若者」というほんやりしたイメージはあったかもしれませんが、「菅」という固有名詞はまったく知られていませんでしたから、「田中角栄対菅直人」を掲げてやったんです。いろんな人が無茶な選挙をやりますが、今振り返れば私の最初の選挙ぐらい無茶な選挙はないですね。いざ、選挙運動を始めたときに支持者名簿は1000人分ぐらいしかないんですからね。当時、東京7区の人口は160万ぐらいで、有権者が100万ぐらいですから、10万票以上とらないと通らないんですけど、名簿はたったの1000人ですよ。(笑い)

——にもかかわらず、その後も立候補を繰り返しましたね。

菅 私は特許事務所で一応の収入を得ながら、最初の選挙をやった事務所を塾にして学生さんに手伝ってもらって市民運動的なことをやっていました。2回目の国政選挙は77年の参院選²⁹で、東京選挙区に立候補しました。このときは社会党を飛び出した江田三郎³⁰さんが社会主義者と市民運動が一緒になってやっつていこうと言って「社会市民連合」という政党をつくりました。ほんの短期間でですけど江田三郎さんと私の2人が代表になって、江田さんが全国区、私が東京選挙区に出ることになったのです。ところが、江田さんがその直後に亡くなられたんですね。それで息子さんの江田五月さんが裁判官を辞めて代わりに出馬されることになりました。

江田三郎氏と社会市民連合の結成

—— 77年5月にできた社会市民連合は78年3月に社会民主連合に変わりました。社市連や社民連について話してください。

菅 私は江田三郎さんとか、息子さんと参院議員になった江田五月³¹さんとは個人的にはまったく面識がなかったんです。もちろん三郎さんは有名な方で、お名前は知っていました。また、親父が江田さんと同じ岡山県出身でしたし、私の妻の兄は江田五月さんと中学校が同期でしたので、間接的にいろいろ話は聞いていました。でも、直接的にはまったく知ら

(29) 東京選挙区(定数4)に立候補した菅氏は19万9千票あまりにとどまり8位に終わった。自民党はかろうじて過半数を維持したが、参院は与野党伯仲時代に入った。全国区に立候補した江田五月氏は139万票あまりで、田英夫氏に次いで2位で当選した。

(30) (1907-1977) 東京商科大(現一橋大)中退。戦前、岡山県議会議員を務めた。戦後、日本社会党に入党し農民運動に取り組む。50年、参院選初当選。63年に衆院に転じた。社会党書記長、委員長代行などを務め、構造改革論を打ち出したが、党内左派の批判を受けて委員長選に敗北。77年に離党し社会市民連合を発足、直後に急死した。

(31) (1941-) 東大卒。地方裁判所判事補などを経て、77年に父三郎氏の急死に伴い、社会市民連合から参院選に立候補し当選。85年、社会民主連合代表。92年、社会党内の右派や若手改革派を集めて政策集団「シリウス」を結成、野党再編を目指した。細川内閣で科学技術庁長官。その後、民主党に移り副代表。07年8月、参院議長に就任。

なかったですね。

社会党の党内事情で江田三郎さんが77年3月に党を飛び出したわけですが、あとで聞いたところによると、そのとき江田さんの周りにおもしろい人がワッと集まったそうです。あのころ元東大教授の丸山眞男先生は武蔵野市に住んでいた。学生運動の草分けとして知られ、「現代の理論」編集長を務めた評論家の安東仁兵衛さんが丸山さんを訪ねたところ、丸山さんが「菅君というのは元気がいい」と私のことを話題にしたと言っています。丸山さんが住んでいたところが私の選挙区だったから、私の名前をご存じだったんでしょうね。もつとも安東さんは「かん」と言わずに「すが」と呼んでたそうですけどね。(笑い)

そういう2、3の話が重なって江田さんの仲間から僕に話があったのです。ところがわれわれも突っ張っていましたが、こっちから会いに行くのはいやだといって、77年4月ごろ、東京の保谷市(現西東京市)の小学校で公開討論会をやったんです。江田さんのほうからは江田さんと他に2人、われわれのほうからは私と何人かが出て、司会を篠原先生と青木茂さんにやっていただきました。その議事録が残っていますけど、3時間くらいいろんな議論をしました。私が江田三郎さんに会ったのはこのときが初めてだったのです。討論会が終わったあと、会場からそう遠くない私の事務所に、江田さんや安東さん、そして江田さんの懐刀の理論家と言われていた貴島正道さんや朝日新聞の石川真澄さんら、い

ろんな方が来られた。そのとき江田さんから「一緒にやらないか」という話が正式にあったのですが、その場では結論を出さなかった。というのも参院選にどう対応するかまだはつきり決めていなかったためです。結局、その日はオープンの討論会で3時間ぐらい、そのあと2時間ぐらい、あわせて5時間ほど江田三郎さんと話し合ったのです。結果的に私は江田さんとお目にかかったのはそのときだけなんです。次にお会いしたのは江田さんが亡くなられた病院だったんです。

——その後は順調に進んだのですか。

菅 江田さんの側と色々なやりとりをして、最終的には一緒にやろうということになり

(32) (1914-1996) 政治学者、思想史学者。東大卒。東大助手、助教授、教授。46年、論文「超国家主義の論理と心理」で日本型ファシズムと天皇制国家の無責任体系を指摘。戦後の論壇や思想界で主導的な役割を果たした。

(33) (1927-1998) 社会運動家、評論家。48年に共産党に入党。東大在学中、学生運動を指導し退学処分となる。59年、「現代の理論」の創刊に参加。共産党と路線を巡って対立し61年に離党した。その後、「現代の理論」の編集長。社会民主連合政策委員長なども務めた。

(34) (1918-2008) 九大卒。陸軍主計将校。抑留も含めて4年近くを東ティモールで過ごした。戦後、社会党中央執行委員などを務めた。理論家で江田三郎氏だった。東ティモール独立に尽力し、「東京東チモール協会」の代表。「菅直人を応援する会」会長も務めた。

(35) (1933-2004) 九州工業大卒。朝日新聞編集委員。長く政治記者や政治担当の編集委員を務め、政治報道に数量的分析を導入した。

ました。参院選の問題と社会市民連合の立ち上げはほぼ並行して進めました。それで、一瞬、私と江田三郎さんが社会市民連合の代表になったわけです。そして間もなく、江田さんが体調を壊して入院され、あつという間に77年5月22日に亡くなられたのです。

江田さんの病状が悪くなってから、江田さんの代わりにだれを擁立するかという話が進んでいました。長男の五月さんか、次男の拓也さんかなどという話がありました。五月さんはだいたい頑強に断っておられたんですけど、三郎さんが亡くなった日がちょうど五月さんの誕生日で、ちょっと因縁めいた話になって、最後は五月さんが裁判官を辞めて引き継ぐことになったんです。他にも社会党代議士の大柴滋夫³⁶さんも離党して参加してくださった。

当初、江田三郎さんは社会党内の江田派議員に「参院選が終わるまでは離党するな」と言っていたんです。何人かの議員が江田さんについて飛び出す覚悟でいたんだけど、「参院選は1人で戦わせてほしい」と言っていたんです。地方議員がだいたい集まってきたんです。江田さんは私みたいに社会党とまったく関係ない人間との組み合わせで、ある種のインパクトを持って選挙戦を展開しようとしていたんですね。独特のエネルギーがウワーッと集まっていた感じですね。いろんなグループが集まってくるわけですから当然、いろんなトラブルはありましたけど、とにかく社会市民連合ができた。ところができた途端に

江田三郎さんが亡くなられて、そのまま参院選に突っ込んだわけです。

参院選の結果は、全国区は田英夫³⁷さんが社会党から立候補して1位で当選し、社市連の江田五月さんが2位で当選した。私は東京選挙区(定数4)に立候補して19万9千票とりましたが8位で落選。それが2回目の選挙でした。

——社会党を飛び出した江田三郎さんと菅さんは、何を一緒にやろうという話をしたんですか。

菅 公開討論会の議論で多少おもしろかったのは、社会主義という言葉に対する強いこだわりが江田さんにあったということです。当然といえば当然なんでしょうね。一方、私は社会主義を自分の思想として語ったことは一度もないです。結局、目指す方向は同じなのに江田さんはそれを社会主義と呼ぶし、私は必ずしも社会主義という言い方をしないで、市民運動の立場から問題提起をした。江田さんは社会党内の最左派である社会主義協会派³⁸

(36) (1917-1998) 早大卒。45年、日本社会党に入党し鈴木茂三郎氏に師事。党中央執行委員、組織部長、総務部長などを務め、60年に衆院選初当選。以後、当選5回。党内では江田三郎氏の側近に。77年、江田氏の死を機に社会党を離党、社会市民連合の代表委員に。社会民主連合副代表になるが、79年の総選挙に落選し引退。

(37) (1923-) 東大卒。共同通信社社会部長、東京放送(TBS)のニュースキャスターなどを経て、71年、社会党公認で参院選初当選。以後、当選6回。78年、社会民主連合を結成し代表に就任した。

との論争から、市民的な論争のほうに軸足が変わってきていたのですね。そんなことを今でもよく覚えています。

私は76年に初めて総選挙に立候補したときに、簡単に言えば「自民党もダメだけど、社会党もダメだ。社会党では政権交代ができない。なんとか新しい市民政治勢力をつくりたい。この選挙をその第一歩にしたい」と訴えて選挙運動をしました。だから、無所属で出たというよりも、所属する政党がないから無所属という立場でやっただけです。しかし、市川さんは「参議院は無所属でもいいが衆議院は政党中心だから、総選挙に無所属で出るというのは筋が違う」と言っていて、最後まで僕を推薦してくれなかったんですよ。それは別として、私としては江田三郎さんが飛び出したときに、社会党を解体するチャンスだと思っただけです。社会党を解体して新しい野党第一党をつくって、それで自民党と戦って勝つというのが、私の最初からの戦略でした。といっても最初はやりようがないから無所属で出たんです。

実は市川さんの参院選で事務局長を務めた74年の秋に、ある場で田中秀征³⁹さんと初めて会ったんですよ。後に自民党やさきがけの代議士になり、細川政権で首相特別補佐をやったあの田中さんです。

——そんな早い時期に田中さんに会っていただけですか。

菅 ええ。田中さんはそのころ『自民党解体論』という本を出していましたから、「腐敗した自民党を解体して新しい自民党をつくりたい」と話されました。僕は田中さんの話に多少触発されて「じゃあ、私が書くとしたら社会党解体論ですね」と話したことを覚えています。

そういうこともあって、総選挙に出るときの僕の考え方はかなり明確に新しい野党をつくり出すというところにあったんです。期せずして社会党内で極めて大きな存在だった江田三郎さんが飛び出してきたわけですから、うまくいけば社会党が解体していつて、新しい政治勢力ができるかもしれない。その勢力と市民派的な勢力がドッキングしていけばいいと考えた。だから社会市民連合というのは象徴的な名前なんです。そして、78年3月に社会市民連合を解散して社会民主連合を結党しました。

(38) 社会党左派の集団で、プロレタリア独裁を掲げた。70年代に急成長して日本共産党を含む全野党共闘を主張するとともに、江田三郎氏らの社公民路線を批判した。地方組織の活動家の多くが協会派だったため社会党国会議員も選挙運動などを協会に頼らざるを得なかった。その後、党内外で批判が高まり、78年に政治活動は行わず理論研究集団に徹する方針に転じた。さらに、冷戦崩壊などの影響もあって力を失い分裂を繰り返して縮小していった。

(39) (1940) 東大卒。衆院議員秘書を経て、衆院選に繰り返し立候補したが落選を続け、83年に初当選。以後、当選3回。自民党に入党したが、93年に離党し新党さきがけに参加。細川政権で首相特別補佐。橋本内閣で経済企画庁長官。96年の総選挙で落選し、以後、福山大教授などを務めている。

社会党は権力をとる気がなかった

——社会市民連合の「社会」は、社会党の「社会」だったんですか。

菅 社会主義者の「社会」と市民運動の「市民」のドッキングなんですよ。

——自民党は硬直化しているように見えながら、保守の中から革新をやる人が出てきているんですね。小沢一郎氏や橋本龍太郎氏、小泉純一郎氏のような政治家が出てきて主導権をとっている。ところが、英国労働党のブレア首相のような人材は日本の革新政党からはなかなか出てきませんでしたね。江田三郎さんが順調に伸びていたら、ブレア首相のような役割を果たしたかもしれませんね。

菅 私の最初の選挙だった76年の総選挙では、自民党から飛び出して生まれたのが新自由クラブでした。一方で革新の側の動きは翌年の江田三郎さんの離党だった。ですから、もしも江田さんがその後も健在であれば相当な動きになったと思います。しかし、結果的に離党直後に江田さんが亡くなられて、社会党解体の動きがとまってしまった。社会党という政党は民社党が分離したり、江田さんが出たりといろんなことが起きているのですが、それ自身はなかなか脱皮しなかったですね。

——菅さんは、社会党とは最初から接点がなかったんですね。

菅 篠原先生とか松下圭⁴⁰さんという方々を勉強会にお招きしたり、松下さんは同じ町に住んでいましたから時々、遊びに行ったりしていました。市民運動をやるようになってからは、ほぼその2人に教えていただいた。特に松下圭一さんの『市民自治の憲法理論』とか『シビル・ミニマムの思想』とかに影響されました。そのころ私は労働組合中心の社会的な運動のやり方に非常に批判的でした。簡単に言えば、60年代に都市化が進み公害とか住宅などいろいろな問題が出てきたにもかかわらず、社会党はほとんど何も対応できないですね。私を取り組んだ土地問題や住宅問題なんかでは、社会党の母体の労働組合は社宅という形で取り組んでいった。しかし、「会社は社宅をつくれ」という要求は、住宅政策でもなんでもないでしょう。どの企業も労使が一体的ですから、公害問題や都市問題、住宅問題、さらには青木茂さんがやっていたサラリーマンの税金の問題とかいうのは、当時の社会党では対応できない構造になっていたんです。

それに対して市民運動がいろんな形で問題提起していくわけです。つまり、社会党が何も対応できないから、それに代わって市民運動が出てきたわけです。つまり自治体を中心

(40) (1929) 政治学者。東大卒。法政大教授。市民参加による自治型政治と地域民主主義を主張し論壇で活躍した。

にした市民参加の運動と理論に発展していったわけです。松下圭一さんの言えば、60年安保でみんな街頭に出て運動したけれども、終わってみんなが地元の杉並区や武蔵野に帰ってみると、何一つ変わってなかった。そういう中で地域に運動が起きてきたわけです。

つまり、社会党や労働組合のような従来型の運動に対して、「地域の中に運動がないから何も変わらないんだ」ということで動きだしたグループができてきて、それらと松下さんや篠原先生のような理論がくっついていった。私はそんな中で理論的にも運動的にも育ってきたわけです。

僕は一時期、農協に対抗して都市住民の利益共同体である都市協同組合というようなものをつくることはできないかと主張したことがあります。青木茂さんの運動もややそれに近いものでした。社会党が好きとか嫌いかじゃなくて、社会党では都市民の抱えている問題を解決できないと考えたのです。だから、社会党を壊して新しい野党第1党をつくって、政権交代を実現しようと思った。ブレア首相の掲げた「第三の道」までとは言いませぬが、どちらかというところは市民参加論の国政版なんです。

——とても説得力がある話ですが、そうした運動はどう伸びていきましたか。

菅 伸びていかなかったですね。(笑い)

——当時、社会党は長期低落傾向にありました。一方で、革新自治体の時代⁴¹ですから、菅

さんの目指したようなことは自治体レベルでは進んでいたのではないですか。

菅 確かに自治体に目を向けると東京では美濃部亮吉⁴²さんが知事で、横浜では飛鳥田一雄⁴³さんが市長になっていました。また、三多摩地域はほとんどが革新自治体になっていました。しかし、国の権力構造には、なかなかこうした動きが届かず変えられないんですね。

確かに一部の自治体は頑張っていましたけど、それだけでは残念ながらなかなか先に進まないのです。やはり中央政府そのものの権力を握らなければいけない。それを実現するには衆参の国政選挙で勝てる政党が重要なんです。それに対して社会党という政党は、あの

(41) 70年代、共産党や社会党などの革新勢力が推す候補が首長となった地方自治体が全国各地に広がった。自民党中心に進められた高度経済成長政策に対抗して、こうした自治体では住民生活を優先する福祉・医療・教育・環境保全・平和政策などに力点を置いていた。東京都の美濃部亮吉、神奈川県の大塚・長洲・京都市の川虎三、大阪府の黒田一知事や横浜市の飛鳥田一雄市長らが知られている。

(42) (1904-1984) 天皇機関説で知られる美濃部達吉氏の長男。東大卒。戦前、人民戦線事件に連座し逮捕された。戦後は内閣統計委員会事務局長、行管庁統計基準局長などを歴任、東京教育大教授にも就任した。67年、東京都知事に当選し、3期務めて全国的な革新自治ブームの担い手となった。その後、参院議員も務めた。

(43) (1915-1990) 明大卒。弁護士。53年社会党公認で衆院選初当選。以後、当選6回。60年の日米安保条約改定時は「安保5人男」と評される論客として安保反対の論陣を張った。63年4月、横浜市長に当選。革新首長のはしりとなった。77年、市長のまま社会党委員長に就任。衆院議員に復帰し5年9カ月、委員長を務めたが、83年9月に参院選敗北の責任をとり辞任した。

ころからすでに権力をとるという気がなくなっていました。自民党と社会党を比べてしばしば「1と2分の1」政党と言われていました。つまり、社会党は自民党の半分の規模の政党という意味です。いちばん元気がよかった委員長の水井たか子さんでさえ、「護憲のため3分の1くらいは頑張ります」みたいなことを言っていたわけですから、政権をとるといふ発想はなかったんでしょうね。

——飛鳥田さんが横浜市長に当選したのは63年、そして、社会党委員長になったのが77年でした。

菅 直接民主主義を訴えていた飛鳥田さんが67年に開いた「1万人集会」には非常に共感しましたね。社会党は飛鳥田さんを委員長に引っぱりました。これは発想としてはよかったですでしょう。しかし、結局は飛鳥田さんを生かすことができなかつたですね。飛鳥田さんの自治体の経験や首長としての経験などを、政権をとることに生かされなかつた。当時の社会党は外から見ても社会主義協会が変な力を握り続けていましたね。江田さんに続いて田さんと榑崎弥之助さん、秦豊⁴⁵さんの3人が離党しましたが、結局、みんな協会とのケンカが原因です。あのころの社会党はオーバーに言えば1世紀前の議論をしているような政党でしたね。

——菅さんが選挙に立候補する過程で、労組とか社会党勢力からの攻撃はありましたか。

菅 それは一般的にはありませんでしたよ。例えば立候補すると「社会党の候補者の票が割れる」という言い方は常にされました。しかし、私の場合は幸いにして社会党の中から割れて出たわけではなくて、もともとが市民派のラインですから何を言われても馬耳東風でした。向こうも攻撃しにくかつたようです。だから、あまり相手にしないで済みました。ここまでなんとか労働組合とうまく付き合っていくことができたのは、自分の選挙では最初の当選までは労組の世話になってないからなんです。ですから最初の選挙というのはいくつこう重要ですよ。

衆参同日選で初当選

——78年に社市連が解散して社会民主連合になりました。

菅 77年の参院選が終わったあと社会党の中がまたもめました。それで田さんと榑崎さん

(44) (1920) 九大卒。議員秘書を経て、60年、社会党公認で衆院選初当選。以後、当選11回。77年に社会党を離党して、78年、田英夫氏らとともに社会民主連合(社民連)を結成し書記長、副代表を歴任した。国会質問で政治スキュンダルなどの追及を得意としていたため「国会の爆弾男」と呼ばれた。

(45) (1925) 2003。関西大中退。NHK記者、RKB毎日放送解説委員、テレビ朝日ニュースキャスターなどを経て、74年に社会党公認で参院選初当選。以後、当選2回。77年に社会党を離党。78年、社会民主連合を結成し副書記長。83年、社民連を離党、無所属となる。その後、民社党に移った。

と秦さんが飛び出したんです。社会主義協会派と田さんたちのグループ「新しい流れの会」との間でいろいろあって、田さんたちが飛び出したわけです。そこで田さんから3人と社会市民連合が一緒になろうという話が出てきたので、それじゃあ名前も少し変えようということになって社会民主連合になったんです。田さんが代表で檜崎さんが書記長になりました。私はまだ議員じゃなかったのが副代表の1人になりました。

——そして、翌年の79年に総選挙がありました。菅さんにとっては3回目の落選ですね。⁴⁶

菅 大平正芳氏と福田赳夫氏の間で繰り広げられた「40日抗争」⁴⁷のきっかけをつくった総選挙ですね。僕にとってはこの選挙が精神的にいちばんキツかった。1回目の選挙は「ロッキード事件」という運動の材料があった。2回目は江田さんが社会党を飛び出したときで新党運動があった。ところが3回目はテーマがないんですよ。「前回もやったんだからおまえやれよ」という話になって立候補したんですが、私の選挙運動のやり方はテーマ型で、テーマがあればそれをバネに動くわけです。しかし、何もないと困るわけです。79年の総選挙は私が出た選挙区に新自由クラブからも候補者が出た。しかも、投票日は台風が接近していたので天気が悪くて投票率が下がったんです。その結果、1回目に比べて得票数も減って、次々点で6万7千票あまりでしたか。精神的にはいちばんしんどい選挙でした。

——ところが、半年後にあつという間に解散総選挙になってしまい、初当選しました。⁴⁸

菅 そうです。79年の総選挙が終わったときに、2、3年は総選挙はないだろうと思った。本格的に準備する金もありませんから、最低限の活動だけはしていたんです。ところが突然の解散で衆参ダブル選挙になったんですね。⁴⁹80年5月、ちょうど解散の日に山形で参院選に向けた野党合同の街頭遊説に出ていたんです。山形選出の衆院議員の阿部昭吾⁵⁰

(46) 自民党は過半数の256を下回る248議席にとどまった。自民党内で大平首相批判の声が強まり「40日抗争」につながった。菅氏は東京7区(定数4)に立候補し6万7千票あまりで6位に終わった。

(47) 79年10月の総選挙の結果を受けて起きた自民党内の派閥抗争。大平正芳首相は統投を表明し田中派が支持した。これに対して非主流派の福田、中曽根、三木派などが辞任を要求。自民党は総選挙後の首相候補を一本化できないまま衆院本会議に臨み、大平氏と福田赳夫氏が首相候補となって決選投票に持ち込まれ、大平氏が僅差で指名された。総選挙から組閣まで40日かかったため、「40日抗争」と呼ばれている。

(48) 衆参両院とも自民党が圧勝した。菅氏は東京7区で前回の倍以上の15万7千票あまりを獲得してトップで当選した。

(49) 80年5月16日、大平内閣に対する不信任案が提出されたが、自民党内の反主流派議員のうち69人が衆院本会議を欠席したため、賛成243票、反対187票で可決された。大平首相が衆院を解散したため衆参同日選挙となった。選挙期間中の6月12日に大平首相が死去、その結果、自民党は両院選で地滑り的な勝利をおさめた。

(50) (1928) 法政大卒。山形県議会議員などを経て、67年に社会党公認で衆院選初当選。以後、当選10回。社会党内では江田三郎派に属し、江田氏死去の77年に社会党を離党、社会民主連合の結成に加わった。その後、日本新党や新進党に所属した。

んに「内閣不信任案が出るから自分は東京にいななければいけない。悪いけど代わりに山形に行ってくれ」と言われ、私はノーバジで肩書だけの副代表として行ったんです。確か民社党、公明党も一緒だったかな。遊説が終わって次に秋田に行く予定だった。それで、夕方みんなで食事していたら「今、内閣不信任案が可決され衆院が解散されました」と教えられた。「えっ!」というんで、急遽、夜行列車に乗って東京に戻りました。帰ったらすでに仲間がピラをつくり車も用意して待っていていました。ですから帰ったとたん、直ちに選挙運動を始めたんです。そしたら、どういうわけか15万票をとってトップ当選したんです。

——あのダブル選挙は、選挙期間中に大平正芳首相が亡くなったこともあって自民党が圧勝しました。決して社民連に追い風が吹いたわけではないです。にもかかわらず前回次々点だった人が、どうして15万票もとれたんでしょうか。

菅 1つは、過去3回の選挙が事前運動になったんでしようね。80年の総選挙は投票率が前回より10%ほど増えたんです。増えた分がほぼそっくり私に来たというのが、直後の毎日新聞の世論調査結果で出ていました。

——他の選挙区では投票率が上がった分は自民党に回ったというのが、全般的な傾向でした。

菅 東京7区だけは違ったんですかね。(笑い)

——菅さんに対する同情票というのはあまりなかったんですか。

菅 まあ、3回も選挙に落ちると、「1回やらせてみてください」という訴えが多少は効くんでしょうね(笑い)。最後は浪花節の面もあったんです。何回も選挙に出ていたので知名度が上がっていて、大勢の人が「1回ぐらいやらせてみようか」と思ってくれたんでしようね。

——以後の選挙は磐石ですか。

菅 いやいや、最初の当選のときも社民連の仲間から「ブロックで通ったんだから、次はダメだ」と言われていたんです。だって選挙区内には15の市があるのですが、社民連の市議会議員というのは全部あわせてもわずか5人ぐらいしかいなかったんです。自民党はじめほかの党は、少なくとも各市に10人ぐらいいるわけですよ。つまり全部で150人ぐらいいるんです。ですから、当選したからといって手足が一举に増えるわけでもないし、後援会だつてなかなかつくることができないし、つくってもあとの面倒が大変なんですよ。ものすごく手間ひまかかりますから。

私の選挙区の構造は、有権者とのダイレクト・コミュニケーションなんです。というのも地区ごとの、後援会組織をつくろうと思ったら、市川さんの関係で応援してくれたある

女性が「なんで私があんな人と会合しなきゃいけないの？」って言うわけですよ。支持者の中にいろんなカルチャーがあるわけです。社会党から飛び出したような人と市民運動からやっている人に、同じ場所に集まってもらって相談しようとする、「選挙は菅さんを応援するけど、あんな人と一緒に会合やったりできないわ」とか言われるんです。それまでまとまった単位で後援会をつくることはやめたんです。それぞれの人と直接会うとか、レポートをつくるのか、そういうダイレクト・コミュニケーションにしたいんです。

——一人ひとりと会っていたら、身が持たないでしょう。

菅 だから、次第に嫁さんに頭が上がりなくなっていくたわけですけどね（笑）。とにかく私の選挙の場合、安定したという言い方はできなかった。

ミニ政党の国会手法

——当選後、初めての国会はいかがでしたか。

菅 私が初めて選挙に立候補したとき社会党から「仮に当選しても、1人でしかも無所属で国会に行っても質問時間さえ与えてもらえないから、何もできない」と攻撃されました。それでいろいろ調べて、「質問主意書⁵¹」という手法を見つけ出して、「この手法を使えば1人でもどうという問題だつてやれるんだ」ということを当選前から主張したんですね。最近

は鈴木宗男⁵²さんがこの方法をずいぶん使ってますけどね。もちろん、この制度は以前からあるんですけど、私なんかかなり早くから意識的に使ったほうでしょうね。

これがある時期猛烈に使ったのは薬害エイズ問題が出たころの枝野幸男⁵³議員ですね。新党さきがけに属していた時代ですけど。最近では民主党の保坂展人⁵⁴議員らがやっていますね。小さい政党はそういうやり方でもしないと何もできないんです。

——菅さんは委員会で質問はできなかったんですか。

(51) 国会法74条に基づいて国会議員が内閣に対して質問する文書。答弁書の文案は各省庁が作成し、閣議決定を経て議長に提出される。国会の質疑を経ないでも、特定の問題について政府の見解をただしたり情報提供を求めることができるため、十分な国会質疑の時間を与えられない少数政党の議員が積極的に活用している。一方で、乱用による行政の停滞などの指摘も出ている。

(52) (1948) 拓殖大卒。代議士秘書などを経て、83年に衆院選初当選。以後、当選7回。北海道開発庁長官、内閣官房副長官などを務めた。02年、幹旋取賄容疑で逮捕され翌年の総選挙出馬を断念。05年に「新党大地」を結党し、総選挙に当選した。

(53) (1964) 東北大卒。弁護士。93年、日本新党公認で衆院選初当選。以後、当選5回。94年に日本新党を離党し新党さきがけに入党。96年には民主党結党に参加した。政調会長、党憲法調査会長などを務めた。政策通議員の1人。

(54) (1955) 東京の区立中在学中、同人誌を主宰して政治・社会問題を取り上げた新聞を創刊し、校則違反とする学校と対立。高校受験時の内申書に記載された「政治・社会運動」を理由に5つの高校に不合格となる。新宿高校定時制を中退後、10数種の仕事を経験。96年10月の総選挙で民主党東京比例区で当選。以後、当選2回。

菅 私は当選してからいろいろ工夫して、なんとか社会労働委員会に入れてもらいました。ちょっとしたエピソードを話します。当時、厚生大臣は園田直さんだったんです。私は社会労働委員会の初めての質問で、人工透析と腎移植の問題を取り上げました。質問する前に実際に腎移植をしている人に会ってきました。私の質問時間は15分なんです。田さんと園田さんが親しかったので、質問の前日、田さんに頼んで園田さんに会わせてもらった。そして「こういう質問をしますから、こう答えてください」という事前レクをやったんです(笑い)。そばにいた厚生省の局長が目を白黒させていましたが、腎移植とか人工透析って、初めて聞いたのではなかなか答えにくいじゃないですか。特に園田さんは医療政策にそんなに詳しいわけじゃないから、前の日にレクチャーしたんです。それが私の最初の質問です。田さんは私を園田さんに紹介してくれただけで、中身は私がレクチャーしました。

——なんだか、ヤラセ質疑みたいですね。

菅 逆のヤラセかな(笑い)。しかし、質問時間がわずか15分ですから下手をすると入り口の話をしているだけで時間切れになってしまいかねないわけです。あのころ人工透析はものすごく儲かる治療だから、本来は透析をしない方がいいような人まで透析しているケースがあったんです。その問題を取り上げたうえで、質問の最後に移植カードを持っていっ

て「大臣もぜひ登録してください」と言ったんです。園田さんは「私は酒をたくさん飲んでるし、あまり使いものにならないんじゃないか」とか言って、そこだけは断られたんです。(笑い)

——という具合に、小さい政党だから質問時間などいろいろな制約はあったんですが、逆に言うとう党の拘束があまりないから何でもできたんですよ。大きい政党は質問主意書を出すだけでもそれぞれの政党の国会対策委員会の了解が必要です。しかし、社民連は幸い国対があつてないようなものですし、うるさいことを言う人もあまりいませんから好きにやれました。それと委員会での対応も「菅君に自由にやらせておこう」ということになったんです。ミニ政党というのはいろんなことができるわけです。

——なぜ、社会労働委員会を希望したのですか。

菅 私は市川さんの選挙を手伝っていたころ、先ほど触れました大渡順二さんと知り合いましたね。大渡さんは朝日新聞に勤めたあと保健同人社をつくった方です。それと僕の親類に医者がいたことも影響していますね。それで少し医療や社会保障に関心を持っていました。しかし、直接的には市川さんの選挙をやった前後の市民運動グループの勉強会ですね。それで私は最初から社会労働委員会がいいなと思って、いろいろ根回しをして入れてもらったんです。

——ずいぶん勉強するタイプなんです。

菅 わりと実践的にやるんですよ。一期目には例の丸山ワクチン問題にも取り組みました。薬事法を全部勉強しましたよ。第12条に薬事審議会というのがある。この審議会に抗悪性腫瘍調査会というのがあって、この調査会が丸山ワクチンを認可しなかった委員会なんです。ところがこの調査会は、あとから丸山ワクチンに似た薬を認可してるんです。それで厚生省に「調査会のメンバーリストを出してください」と要求したのですが出さないんです。そのころ私に委員会で質問する機会があり、役所側が質問内容を事前に聞きにきた。

それで私のスタッフが「こっちがメンバーリストを要求しても出さないのに、あしたの質問内容を事前に聞きにきたって教えることなんかできない」と追いついたんです。すると厚生省は夜になってやっとメンバーのリストを出してきて、「ぜひ慎重に取り扱いを」と言った。「はい、わかりました」と言って、すぐ記者会見して発表したんです。(笑い)

その中に一人二役の人物がいたんです。簡単に言うと、薬事審議会のメンバーが同時に薬の開発に携わっていたわけですね。それが「一人二役問題」で、このことが表に出たもんだから、厚生省としても丸山ワクチンをつぶせなくなりました。そのため今日に至るまで、あの薬だけ特例で有償治験薬なんです。お金は払うけれども、治験用の薬ということなんです。認可されないけれども使っている薬。そういう例外的な扱いを何年かおき

に更新しているんです。

——菅さんが厚生大臣のときに「認可しろ」とは言わなかったのですか。

菅 丸山ワクチンについては最初のころはいろいろ実験をやったデータが出たんですが、その後の比較臨床実験でのデータがなかなか出ないんです。つまり効果があるという決め手がないんです。免疫剤というのは比較臨床実験そのものが非常に難しく、ほんとは確率論でやるしかないんです。

「シリウス新党」の失敗

——その後、菅さんは当選を続けましたが、所属した国会の会派がよく変わりましたね。

菅 80年に社民連で初当選したときは、翌年、新自由クラブと一緒に「新自由クラブ・民主連合」という国会内の会派をつくりました。しかし、政党名は最後まで社民連のままです。

(55) ヒト型結核菌から製造したワクチンで、発見者である日本医科大学の丸山千里(ちさと)氏の名前をとってよばれる。丸山氏は結核やハンセン病の患者にがんが少ないことに気づいてこのワクチンを開発した。丸山ワクチンは抗悪性腫瘍剤としては承認されないまま期限付きでがん治療に使用されていたが、厚生省は98年、無期限に延長した。

また、しばらく後のことですが、社民連の議員が2つの会派に分かれるということもやっただけです。86年7月の総選挙後、社民連は4人の衆院議員が当選しました。そのとき民社党が共産党より1議席少なかった。それで民社党から「社民連と一緒の会派を組みたい」と言ってきたんです。しかし、民社党とだけ会派を組むのもしんどいなということになって、江田さんと私が社会党と一緒の「社会党・護憲共同」、阿部さんと檜崎さんが民社党と一緒の「民社党・民主連合」という会派をつくったのです。さらに90年2月の総選挙後は、進歩党の田川誠一さんと一緒に「進歩民主連合」という会派をつくりました。こういう具合に、とにかくミニ政党としてできることはほすべてやってきたといってもいいでしょうね。

—— ずいぶん知恵を使わなければならなかったのですね。

菅 大きな問題で言うと、90年2月の総選挙で社会党は委員長の上井たか子さんの人気が出て、80人ぐらいだった議席が一举に136議席に増えました。仙谷由人⁵⁶さんら「土井チルドレン」と呼ばれた人たちが大勢、当選しました。その人たちと江田五月さんと私で新しいグループをつくったんです。それが「シリウス⁵⁷」という名前のグループです。

90年まで社民連は新自由クラブと組んだり、社会党、民社党と組んだのですが、社公民路線がうまくいかなくなってから檜崎さんや田さんはさらに別の野党結集を試みていまし

た。私はその動きにはあまり深入りしなかったんですが、「シリウス」は例外で、ある程度深入りました。社会党のニューウエーブと呼ばれていた人たちや、その直前に生まれた連合参議院という参議院会派の弁護士さんらに個人的に親しい人がたくさんいたので、江田さんをリーダーにして彼らと一緒につくった勉強会がシリウスだったのです。

こうした動きが、93年の政変につながっていったと思っています。私の政治的活動の軸足も、社民連から次第にシリウスや同じころできた「制度改革研究会⁵⁸」に移っていきました。この「制度改革研究会」は田中秀征さんとか武村正義さんとか、細川護熙さんらが加わった勉強会で、私もちよっと手伝いをしました。

——そして、93年を迎えるわけですね。

(56) (1946) 東大卒。弁護士。90年に社会党公認で衆院選初当選。以後、当選5回。民主党政調会長、幹事長代理などを務めた。民主党内では前原誠司氏や枝野幸男氏ら若手議員の後見役といわれている。

(57) 92年11月に結成された社会党、社民連、連合参議院の若手議員による政策集団で、政権交代が可能な政治勢力の結集と政界再編に向けて野党の側から具体的な行動を起こすことを目的とした。社会党21人、社民連2人、連合参議院4人の計27人が参加した。代表幹事は江田五月社民連代表。93年の総選挙でメンバーの大半が落選し解散状態となった。

(58) 93年1月、行政改革の進め方や地方自治のあり方などについて意見を交わすことを目的に与野党の中堅・若手議員らがつくった勉強会。座長に自民党の武村正義氏、事務局長には田中秀征氏が就任し、社民連の江田五月代表、日本新党の細川護熙代表も参加した。この勉強会は新党さきがけの母体ともなった。

菅 93年は宮澤内閣に対する不信任案が自民党議員の造反で可決され、解散総選挙になったわけです。6月18日に衆院が解散になると、直後に武村さんから自民党の10人の議員が「新党さきがけ」⁵⁹を旗揚げしました。私は自民党議員じゃなかったので声はかかりませんでした。さきがけが旗揚げした直後に、小沢一郎さんたちが自民党を飛び出して「新生党」を結党しました。

このときの総選挙でシリウス新党論というのが出たんです。シリウスを政党にして、総選挙に臨もうという考えですね。結果的にはいろんな理由で江田さんもそこまで踏み切れなかったですね。社会党が選挙後、小沢さんたちと一緒に組むということを決めていたので、その中をまた割るのは問題だと言われて、シリウス新党まで走れなかったんです。

選挙後は私だけが新党さきがけの会派に入っただけです。そして最終的に社民連を離党してさきがけに入りました。つまり私は社民連の解散より少し早い段階で社民連を離脱したんです。

——それはどういうわけですか。

菅 さっき話した流れなんです。シリウス新党ができれば、それが一番いいと思っています。だけどそうならなかった。しかし、今さら社会党や民社党、あるいは社民連じゃないだろうと考えました。一方で、制度改革研究会は事実上、さきがけのメンバーのある種

の母体になっていました。それで選挙のときにハラを決めたのです。社民連は小さい政党ですから、当選後にまた会派をどこと一緒にするかという問題が必ず起きるわけです。総選挙の直前まで私と江田さんは社会党との会派に入っていました。総選挙後に所属会派をどうするかという話になって、「私はさきがけの会派に入ります」と言った。江田さんや橋崎さんは社会党との会派だった「社会党・護憲連合」です。そして、半年ほど活動をして、94年1月に社民連を離党して、正式にさきがけに入りました。結局、社民連はその年の5月22日に解散しました。形式的には日本新党との合併ですが、江田さんと阿部さんが日本新党に入りました。当時はさきがけと日本新党が一緒の会派「さきがけ日本新党」をつくっていましたが、私は江田さんらと再び同じ会派になったわけです。あのころの永田町はものすごい混乱期でしたからね。

(59) 武村正義氏が当選1、2回の自民党議員10人が93年に結党した政党。代表は武村氏。日本新党の細川護熙氏と連携して、細川政権を誕生させた。その後、自民、社会、さきがけ3党による連立政権を成立させた。96年9月、鳩山由紀夫氏や菅直人氏らが離党して民主党を結党。10月の衆院選では当選者2人の惨敗に終わり、98年に事実上解散した。

(60) 元熊本県知事の細川護熙氏が92年5月に旗揚げした政党。同年7月の参議院選挙の比例代表区で361万票を獲得し4人が当選した。さらに93年7月の総選挙でも35議席を獲得。細川氏は8党会派に推されて連立政権の首相になった。しかし94年4月、東京佐川急便問題に絡んで細川首相が辞任すると急速に求心力を失い、12月、新進党の結成とともに解散した。

——80年代末から、リクルート事件や金丸事件など自民党長期政権時代の終わりを告げるような事件が相次ぎました。こうした状況を前にして菅さんはどういうことを考えていたのですか。

菅 制度改革研究会は政局的なことについてはあまり議論していません。あのころは自民党に手をつたむというよりは、野党の再結集議論が中心でした。そして、私はそれにもあまり関心がなかったです。政界再編がらみの問題については、シリウスができるまであまり動いていません。

国会議員がわずか4、5人の母体では政界再編などを仕掛けるのはなかなか大変なんです。社民連で私はずっと政調会長をやっていました。このポストはいろいろ勉強にはなつたんですが、政局めいたことをするわけではありません。シリウスができる前までは、ストリートに政局的な動きはできなかったし、そういう立場にいなかったですね。

——シリウスというのはどういう組織だったのですか。
菅 社会党に代わる「新しい革新」という表現がいいか、「市民派」という表現がいいかわかりませんが、とにかく自民党に対抗する勢力をつくるための1つの政治集団という発想ですね。事務所もつくって、機関誌もつくりました。ただ、93年に新党を立ち上げきれなかったのも、雲散霧消してしまいました。

——江田さんが決断できなかったということですね。

菅 そうです。あのころは日本新党以外に羽田さんのグループがあり、シリウスがあり、ちよつと変わったところでは平成維新の会⁶¹のようなグループもあるという状況でした。それが次の政界再編の1つの渦だったわけですね。シリウスについて言えば、国会議員の数はけっこう多かったんです。社会党や連合参議院も入っていましたから、多いときは30人ぐらいいました。これがもつと動けばおもしろかったんですが、最後のところはちよつと動ききれなくて残念でした。

——シリウスを政党にするかしないかという局面は、93年になってからですか。

菅 6月に衆院の解散が決まってからです。みんな所属していた政党を脱党できるようなエネルギーはなかったですね。社会党は93年1月に赤松広隆⁶²さんが書記長になるんだけど、まだ当選1回で44歳でした。社会党所属のメンバーは社会党の改革と外との連携という両

(61) 92年11月、マッキンゼー・ジャパン会長の大前研一氏が設立した政治団体。次期総選挙で、推薦候補を現職・新人を合わせ50人当選させることを目指すとした。太田誠一氏ら超党派の現職国会議員8人が顧問に就任。93年の総選挙で約80人の推薦候補が当選した。しかし、次第に活動が低下し95年に政治団体解散届を提出した。

(62) (1948) 早大卒。日通社員、愛知県議などを経て、90年に社会党公認で衆院選初当選。以後、当選6回。社会党書記長、民主党副代表などを務めた。

面の問題を抱えていました。東京の板橋区から出ていた渋谷修⁶³さんが唯一、93年5月に造反して社会党を離脱して「板橋民主党」をつくるんです。だけど、他には選挙前に離脱した人はさすがにいないです。私や江田さんから見ると、社会党を離脱して新党をつくったほうがいいと思っていたんですが、社会党の人たちからすれば、そこまではしたくないし、社会党の執行部からもプレッシャーがかかるわけです。「江田さんや菅とゴソゴソやってどうする気だ。いい加減にしろ」というプレッシャーですね。

当時は山花貞夫⁶⁴さんが社会党の委員長でしたが、社会党もそして連合の山岸章会長も、総選挙を機に自民党に代わる連立政権をつくるために小沢さんと組むという方向に動いていました。もしあのとき、社会党が昔ながらの凝り固まった路線だったら、シリウスの社会党メンバーは党を飛び出したかもしれません。しかし、現実に細川政権をつくるとき与党になったわけですから、小沢さんたちと一緒に組むという選択ができるころまで変化したわけですね。野党が結集して政権交代を実現することが重要だと考えれば、その時点で社会党を分裂させるわけにいかないということになります。まあ、それほどの度胸がなかったということかもしれません。

社会党の議員や候補者はほとんどの人が足元は全部労働組合ですからね。自前で選挙をすることは考えられないわけです。それと社会党だけで政権をとるといって社会党純粋論じ

ゃあなくて、連立でやりましょうということだったから、それで離脱しきれなかった。

—— 菅さんは既存政党を超えた政治的動きをつくろうとしてきたわけですが、この試みはシリウスでは失敗したということですか。

菅 まあ、失敗というか……。総選挙の直前に自民党以外の各党党首がずらっと並んだ写真があるんですよ。社会党の山花さん、新生党の羽田さん、公明党の石田幸四郎委員長、民社党の大内啓伍委員長、そして社民連の江田さんの5人の写真ですね。総選挙が終わったら一緒に政権をつくるということ合意して発表したときの写真です。このとき、野党連合につくのか自民党につくのかということをはっきりと言わなかったのが日本新党とさきがけなんです。その時点では、社会党も社民連も、野党連合の枠組みの中に入っちゃったんです。それとシリウスが独自で飛び出せなかったというのは裏表の関係ですね。

よく見ると、小沢さんたちは自民党内の一派閥の中の小沢グループが集まって統一行動をとったわけですが、さきがけは派閥単位の集まりではないですよ。さきがけを結党す

(63) (1950) 東海大卒。社会党員となり党の外郭団体職員を務めた。90年、社会党公認で衆院選初当選。

その後、「党議拘束による中央集権的な政党のあり方を改めるべきだ」として社会党を離脱し「板橋民主党」を結党。社会党は除名処分とした。その後、民主党に移ったが、落選を続けた。

(64) (1936-1999) 中大卒。弁護士。76年に衆院選初当選。以後、当選8回。社会党副委員長、書記長などを経て93年に委員長。細川内閣で政治改革担当相を務めた。

る前に「ユートピア政治研究会⁸⁵」というのがあって、そのあと「制度改革研究会」ができて、派閥を超えた議員が武村さんを中心に10人集まって自民党を飛び出すわけです。私はさきがけ結党の前から武村さんや田中秀征さんらと制度改革研究会で一緒でしたが、付き合ってみて、さきがけを政界再編の1つの軸にしようと思うようになりました。政界再編を保守の側からやろうとしているさきがけに対して、革新側からはシリウスがやるべきだという構図が私の頭の中にはあったんですが、できませんでした。

——菅さんは、さきがけに対するシンパシーが最初からかなり強かったわけですね。しかし、その前の制度改革研究会は細川さんと武村さんの思惑の違いが露呈した研究会で、あまりうまくいかなかったのではないかと思います。細川さんは制度改革はシステム改革であり、政権交代が必要だなどと大きな構想を描いていた。一方、武村さんは政治改革に興味があつて、いまの自民党はダメだから選挙制度を変えて政治をよくしなければいけないという感じでした。後に袂を分かつことになった細川さんと武村さんの発想の違いは、この辺から露呈していたのかなと思います。制度改革研究会に参加されていていかがでしたか。

菅 言われてみればそういう違いが潜在的にあつたのかもしれないですね。武村さんは政治改革を主張していた後藤田さんへのシンパシーが強かったです。また、田中秀征さんの「自民党解体論」、あるいは田中さんが新自由クラブでとつた行動は新党論じゃないんですね。自民党を周辺あるいは内側から改革して新しい自民党をつくるという発想ですから、新党ないしは野党と組んでの政権交代を実現した細川さんとは、今になって考えると若干違っていたのかもしれない。しかし、あの制度改革研究会をそこまで言うのはあとの話で、選挙制度や地方分権論などの構造改革というのは、性格は違うかもしれないけど大きなテーマですから、研究会に集まった人たちがその後そういう行動を起こしたという意味では、あれほど意義のある研究会は珍しいんじゃないかと思います。

——細川さんの日本新党は前年の92年にできましたが、菅さんと日本新党との接点、細川さんとの接点はどうな感じだったんですか。

菅 私が誘われたか、私から近寄つたのかは別として、キーマンは田中秀征さんです。細川さんとお付き合いは制度改革研究会で始まったので、それ以前は特にないです。日本新党という党と付き合い合つたという感じもあまりないですね。

田中秀征さんは私にとってはインパクトのある政治家であり、尊敬に値する人物として

(65) リクルート問題や政治資金集めパーティーに対する世論の厳しい批判をきっかけに、自民党の当選1回の代議士有志がつくった勉強会。88年9月に発足。武村正義、鳩山由紀夫、田中秀征氏が参加し、多くのメンバーが新党さきがけに参加した。

見ていました。彼が「自民党解体論」を、私が「社会党解体論」を考えたのも、彼との会話の中ですし、最初に会ったとき、1時間も話さないうちに「あなたも選挙に出るよ」とか言われて、「この人、おもしろいことを言うなあ」と思いました。

武村さんに対する僕のシンパシーも強かったです。私の知人に学生時代から武村さんを知ってる人がいて、彼は田舎に帰って滋賀県庁に勤めていたんです。たまたま彼が国内留学で筑波大にきていたとき、私が初当選した選挙の事実上の事務局長をやってくれたんです。その後、彼は滋賀に戻ったんですが、私が彼に落選した場合は秘書になる前提で都議選に出ないかという話をもちかけて、本人もその気になったので、私は滋賀県知事だった武村さんに会いに行ったわけです。そして「あなたのところにいるこういう男を私の秘書にしたい。都議選に出すので了解してほしい」と言った。若い職員ですから、武村さんもそれほど意識してなくて、「そんなのがうちにいたか？」みたいな感じでしたけど、そのとき初めて武村さんと会った。結局は彼の母親が選挙に出ることに断固反対したため、都議選の話は潰れました。このときの縁で、その後も武村さんと付き合うようになったのです。

——当時、鳩山由紀夫さんとはまだ接点がないわけですか。

菅 制度研には鳩山さんも名前を連ねていたと思うんですが、私が付き合った中心は田中さんと武村さんの2人です。

——選挙後、さきがけにはスナリと入れたのですか。

菅 選挙前から武村さんや細川さん、あるいは田中秀征さんと細川さんの間では、日本新党とさきがけが連携して同じ選挙区で候補者がバッティングしないよう調整する話がかなり進んでいたようですが、私はそういう調整の対象には入ってなかったもので、東京7区には日本新党から渡辺浩一郎君が立ったわけです。その結果、社民連公認の私のほか、自民党、社会党、公明党、共産党、日本新党など合計で9人候補が出て、幸い私が15万票あまりでトップ当選しました。

総選挙の日、つまり私の当選が決まった日の夜ですが、私は日本新党の事務所とさきがけの事務所に行って、細川さんと武村さんに「できたら一緒にやりたい」ということを言ったわけです。私以外にもう1人、似たような立場の人がいたんです。玄葉光一郎君⁶⁶なんです。彼は無所属で通ったんです。無所属で通って新進党に行かなくて、さきがけ系の会派に入ってきたんです。そのときは会派は「さきがけ日本新党」でしたが、私はどっちの

(66) (1964) 上智大卒。松下政経塾、福島県議会議員を経て、93年に無所属で衆院選初当選。以後、当選5回。新党さきがけに入り、民主党結党に参加した。

政党に入るか決めてなかったんです。すると、田中秀征さんが「菅君、さきがけでいいんだらう?」と言うから、「ああ、いいです」と言つてさきがけに入ったわけです。